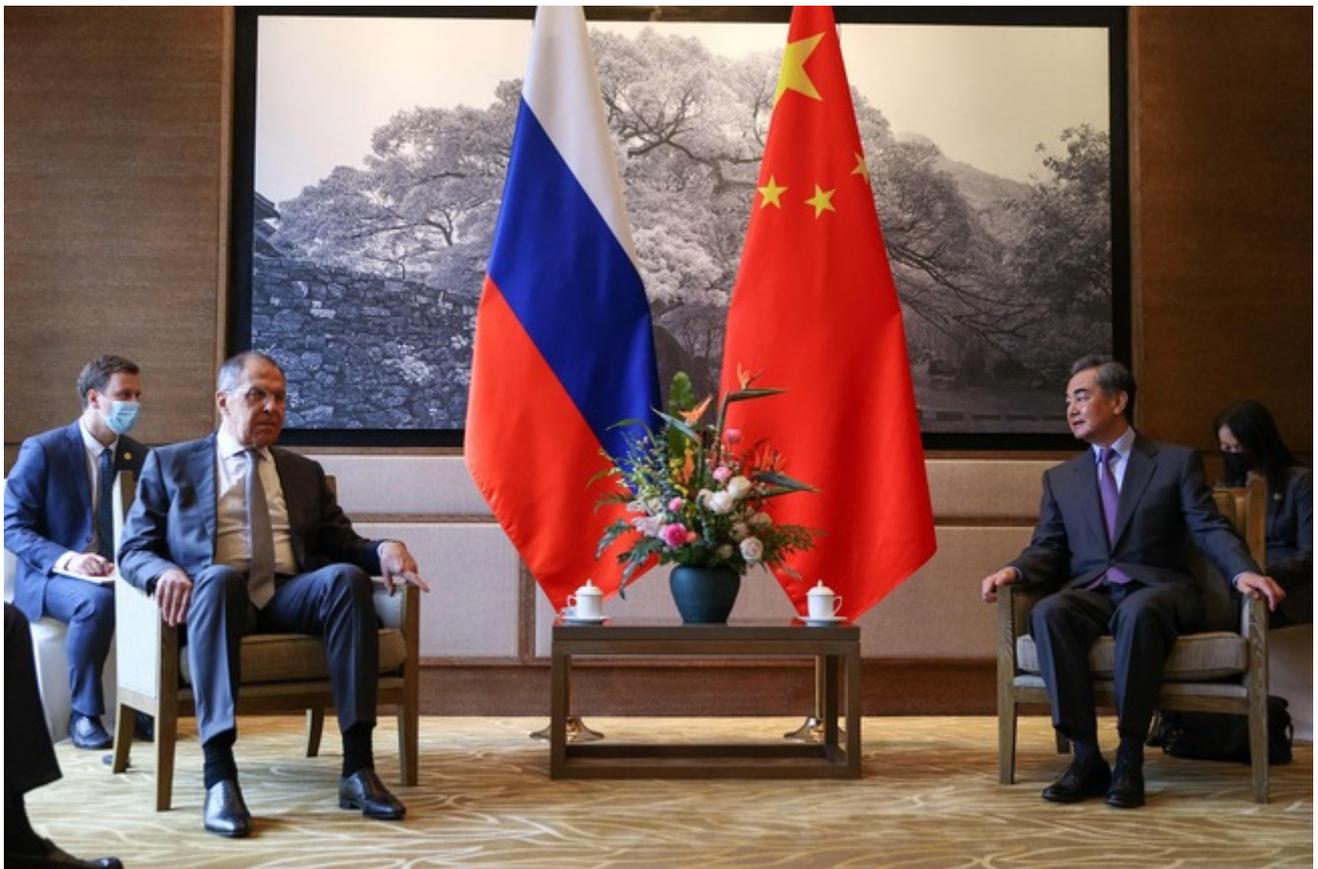


TOP > 記事 > 自衛隊最高幹部が語るウクライナ戦争（第2部）——プーチンの失敗が中国と北朝鮮に与えた現実認識

# 自衛隊最高幹部が語るウクライナ戦争（第2部）——プーチンの失敗が中国と北朝鮮に与えた現実認識

執筆者： 2022年6月9日



会談するロシアのラブロフ外相と中国の王毅外相（2021年3月） ©AFP＝時事

今回の戦争から教訓を得ようとしているのは西側諸国だけではない。中国と北朝鮮は、ウクライナ国民の善戦とプーチンの苦境をどのように見ているのだろうか。 [（こちらの第1部／下から続きます）](#)

**中国経済はロシア経済の10倍**

**岩田清文（元陸上幕僚長）**：次に、中国や北朝鮮が、今回のウクライナ戦争をどう評価して、どのような新たな現実認識を得ているかという問題について。もちろん推測にはなりますが、考えていきたいと思います。武居さんからお願いします。

**武居智久（元海上幕僚長）**：まず、中国・北朝鮮ともに、戦略核兵器を持てば、非戦略核兵器による恫喝で対象国の行動を抑止できる、あるいは特定の行動を強要できると考えた可能性がある。ですから、岩田さんが仰ったように、中国は戦略核兵器の増強を急ぐでしょう。北朝鮮も、兵力差があっても戦い方次第では負けない可能性がある、勝手に思ったかもしれない。

それから中国については、オリンピック前の首脳会談でロシアと無制限のパートナーシップを再確認しているのですが、これは誤りだったと考え直しているかもしれません。戦況が長引くほど、今中国が取っている「中道」を維持するのは難しくなっていくだろうと思います。中国は、ロシアや北朝鮮と組んでアメリカや西側を押し戻そうとする考えを持っていたと言われますが、実際にロシアが戦争を起こしたことで、これを続けることが難しくなった。また、中国はロシアから武器等の技術を輸入していますが、その有効性に疑問を持ったでしょう。後方支援の重要性にも気づいたはず。今、中国軍が建設中の戦力投射支援能力とは、軍民融合、つまり民間輸送力の動員体制を強化するというものですが、これをさらに加速するでしょう。要するに、台湾有事の際は民間船舶を大量に徴用して輸送や後方支援に使う。中国海軍だけでは兵員2万人弱しか運べません。戦車や装甲車も運ぶとなると兵員数とトレードオフになるので、実際にはかなり限られた人間しか運べないんですね。



それから、中国は現在のウクライナの状況を見て、台湾への侵攻は、ロシアが2014年に併合したクリミア半島とルハンシク・ドネツクぐらいにとどめ、西側の反応を見て、次を考えようと思うかもしれない。つまりウクライナを台湾に置き換えて考えれば、習近平は金門島・媽祖島などを取ったら1回そこで作戦を止めさせ、とりあえず領土を回復したという実績を作る。そしてプーチンのように焦ることなく、じっくりと時間をかけアメリカに負けない軍事力を蓄えてから台湾本島に攻め寄せてくるのかなど。この場合、西側は非常に困った状況になると思います。小さな島を奪うだけだったら、アメリカや西側は外交的に非難するだろうけど、象徴的な内容にとどまって**台湾防衛には乗り出さないかもしれない。中国はそう考える可能性がある。**ロシアがクリミア半島でやったように、ハイブリッド戦で約

海自OBとして初めて米海軍大学校の教授を務めた武居智久・元海将

3000名の守備兵を短時間で無力化してみせる。その段階で人的な被害が少なく、蔡英文政権が軍事的な奪回作戦を命じるのが遅ければ、何が起こるんだろう

うと。

あるいは、いまプーチンがウクライナで行っているように、習近平がどんな状態でもいいから台湾を統一することが戦争目的ということならば、つまり**台湾を焦土化してでも統一しようとするならば、核兵器の使用も辞さないだろう**。とりとめのないことを言いましたが、中国はこのような教訓を得た可能性があると思います。

**尾上定正（元航空自衛隊補給本部長）**：中国も今ロシアとの関係についてすごく悩んでいると思います。プーチンと習近平が長時間会談して、北京オリンピックの間はウクライナ侵攻をやらなくてくれとか、その後の中露協力体制をしっかりと作っていくというようなことを、かなり具体的に同意していたわけですね。ところが蓋を開けてみると、ロシアの旗色がずいぶん悪い。西側は結束して極めて強い経済制裁や禁輸措置、あるいは武器支援をしている。こうなると、どこまでロシアと一緒にやっていけばいいんだろうかと。台湾海峡や南シナ海、東シナ海を支配下に置くためにどういうやり方がいいのか、中国は一生懸命考えているはず。[去年の我々のシミュレーション](#)でやったような本格的な武力侵攻、つまり台湾海峡を越えて水陸両用部隊が着上陸作戦をするというようなことは、やっぱりリスクが高すぎるし、コストも大きすぎるというふうに判断している可能性がある。武居さんの仰るように、もう少し時間をかけて台湾を締め上げていこうと考えていると思います。

いや、習近平の頭の中はわからないので、ひょっとしたら「プーチンめ、しくじりやがって。俺だったらもっとうまくやるのに」と思っているかもしれない。中国経済はロシア経済の10倍の規模があります。それぐらいの経済力があれば、アメリカもヨーロッパも歯向かうことはできないだろうと。経済制裁をかけたらそれはすぐにブーメランとなって、お前たちの首を絞めることになるぞ、と思っているかもしれない。対露制裁ですら、ロシアがエネルギーを握っているせいでヨーロッパは自分たちの経済制裁でアップアップしているじゃないかと。そういう見方もあるのかなという気はします。

ぐっとテーマを絞って台湾統一作戦を考えたときに、中国にとってのレッスンはおそらく三つあって、一つはやはり台湾を孤立させるということ。アメリカの介入、国際社会からの支援が来るような状況は、中国にとって一番都合が悪いので、様々な手段を使って台湾を物理的にも情報的にも孤立させる。シミュレーションでやったように防疫、検疫を名目に封鎖をかけるやり方もあると思います。あるいはプーチンと同じように、「介入したら核を使うぞ」と。そういう恫喝が日本やアメリカに効くのは今回のウクライナでわかっていますから、早い段階で核の恫喝をかけて台湾を孤立させようとするのは、ほぼ間違いないと思います。

二つ目は、リーダーシップの重要性です。今回ゼレンスキー大統領がウクライナの国防のシンボルになっています。自らSNSを駆使して、非常に効果的に戦略的メッセージを西側諸国に発信していますし、国内的にも士気を鼓舞している。逆に中国からすると、**台湾のリーダーシップを早い段階で潰す**。台湾の政治指導者のデキャピテーション（斬首作戦）をやって、傀儡的なリーダーシップを置く。これが非常に有効だということを読んだと思います。だから中国は今後、この二つをどうやって仕掛けていこうかと考えるのではないかと思います。

三つ目、軍事的な意味では、台湾海峡とウクライナは地上戦と海洋戦略環境とでだいぶ違いますが、ミサイルなどのスタンドオフ兵器、ドローンや無人機の有効性は明らかに証明されたと思います。先ほど武居さんが言及されたトルコのバイラクタルTB2のような無人機は、中国は山ほど持ってます。なにしろDJI（大疆創新科技有限公司）があちこちに売りまくってますから。そういう無人機のアドバンテージを徹底的に使うでしょう。ミサイルもそうです。自国の人的被害を出さない戦い方で、初戦で圧倒的な優位を作る。台湾の基地、場合によっては日本の南西諸島にある米軍基地等も含めて、早い段階でミサイルによって徹底的に叩いて圧倒的な優位を作ってしまうというやり方をするのではないのでしょうか。

岩田：ありがとうございます。兼原さんお願いします。

## 西側の思わぬ大結末

兼原信克（元国家安全保障局次長）：中露関係については、二つの暴力団が、アメリカという警察官に抵抗するためにくっついて利用し合っているというだけの話で、お互いに利用価値があるから利用してるだけであって、別に相手を好きでもないと思うんですよね。中国からすると、ユーラシア大陸の西側で血が流れてくればアメリカの関心がそっちに行くので、その分自分が楽になる。だから「ロシア頑張る」と思っていたら、キーウ電撃戦で大下手を打ち、残虐行為もたくさん報道されてきたので、「ちょっと付き合いきれないな」と思っているはず。プーチン組の悪行の恥と罪を分かち合う気は全くない。ロシアには頑張る欲しいが、「ここで警察に睨まれるのは嫌だ」というのが習近平の本音だと思います。

それでちょっと先のお話をしますが、実はロシア人は日本人とは逆に「元寇負け組」なんですね。モンゴル族に250年間も支配された人たちです。カラコルムとかサライとか、モンゴル人の都に行って朝貢していた。この歴史はロシア人にとって心の重荷になっているので、彼らが再び中国に対して朝貢国家のようになることは絶対ないと思います。将来ロシアの国力が決定的に落ちるのはもう明らかですが、**中露の蜜月関係はどこかで反転するかもしれない**。日本としては、ロシアが落ち切った後の“底値買い”を、どこかで考えないといけなないと思います。プーチンの次の指導者がゴルバチョフのような西向きな指導者になるかもしれません。

中国がウクライナ侵攻から何を学んだか。「東風が西風を圧する」という毛沢東の言葉を習近平は最近も繰り返していますが、**実は西側全体が集まると今でも中国の2.5倍の経済力**なんです。NATO軍は強いですし、アジア太平洋地域にはNATOはありませんが、韓国や豪州を引きずり込んで、イギリスとかフランスも合わせれば、結構な勢力になります。西側諸国がまとまると結構な力です。おそらく習近平は、ドナルド・トランプが西側の結束をぐちゃぐちゃにするのを見て「もう大丈夫だ」と思っていたのでしょう。トランプ大統領とうまくいっていたのは日本の安倍総理だけです。それが今回、プーチンが暴れて、バイデン大統領の下で西側が思わぬ大結束をしたのを見て、「やっぱりこいつら全部を敵に回すのは怖いな」と思っているはずですよ。

台湾有事についてはアメリカは早めに介入すると私は思いますけど、仮に直ちに介入しないにしても、今回のようなペースで情報とお金、弾薬と物資を台湾に突っ込まれると、いくら中国軍が攻めても台湾軍が負けないというところに持ち込まれる可能性がある。日中戦争において日本軍が“援蔣ルート”で苦しめられたのと同じです。習近平は台湾統一戦略の再考を迫られているだろうと思います。

あと、習近平とプーチンは似ているところがあります。ヒトラーもそうですけど、独裁者って私達とは違うことを考える人たちなんです。歳をとってくると、自分も最後は死ぬんだと気がつく。そうすると、歴史に名を残すだとか、自分の末裔がどうなるかとか、そういったこと考え始める。習近平はあの紅衛兵時代の人で、実は若い頃からけっこう馬鹿にされてきた。いつか見返してやるという気持ちでここまで上り詰めた人ですから、最後は台湾を統一して中国の正史に名を残すんだと、多分こういう間違っただけのことを考えてるんじゃないかと恐れます。

私達からすればバカげた話ですけど、おそらく本人は真剣で、今から5年後、さらにもう1期やったとして10年後、彼はもう80歳前です。その時、彼の周りにはおべっかを言う若い奴しかいないでしょう。石田三成や、柳沢吉保みたいな人ばかりで、何を聞いても「大丈夫です」しか言わない。老いた独裁者というのは、周りに親身に忠告してくれる人が誰もいないわけです。だから判断を大きく間違えるかもしれない。今回プーチンに起きたことは、まさにこれだと私は思います。FSB（ロシア連邦保安庁）の連中がおべっかを使ったんですよ。「ゼレンスキーなんてただのコメディアンですから、すぐ逃げますよ」とか言ってね。それでプーチンもその気になった。大統領選挙が2年後なので、クリミアの時みたいに一発バックドロップを決めて、キーウを取っちゃえば再選だと、こう思ったのでしょう。それでやってみたら大変なことになっちゃったと。こういう馬鹿な失敗が、独裁国家では起き得るということなのです。なので私は、今回のプーチンの失敗を見て、習近平は今ちょっと怯んでいても、また5年後になると調子に乗って、馬鹿な失敗をする可能性はあるのではないかと思います。

それに対する西側の結束方法については、日本も見習うところがあります。アメリカという国は、国連総会とか国連安保理で一生懸命に多数派工作をやるんですね。日本の外務省は絶対やりませんよ。私だって「時間の無駄です」と言っちゃいますから（笑）。でもアメリカはこれを一

生懸命にやって、本当に連合軍を作るんです。**努力して国際社会の半分以上は必ず取る**。私達もこういう戦争の仕方を覚えなさいといけません。戦争をやる時はサシで戦うのではなくて、たとえ大国でも小国でも全部集めて大連合を作るとというのがアメリカのやり方です。日本も敗戦後、サンフランシスコ講和会議にいたら、連合軍が48もいたわけですよ。当時、世界の国の数は50くらいだから、世界中が連合軍だった。これがシェリフの戦い方です。

それから今回感心したのは、アメリカは議会で問題になるくらいミリタリーインテリジェンスを外に出しています。ロシア軍の動きを綺麗に描いて見せている。「ロシアは大侵略を企図している」と。これはインテリジェンスコミュニティと政策部局の間で事前に相当な調整をしないと出せない情報ばかりです。いざという時には機密情報でもバーっと出して、敵の悪行三昧をさらけ出す。そして侵略者として国際世論の中で真っ黒に塗りつぶす。こういうことは今の私達にはできないので、十分練習する必要があると思います。今回は西側の情報によってかき消されていますが、ロシアは「先に向こうが撃った」とか「向こうの残虐行為がひどい」という嘘を出しまくっています。伝統的な戦場でのプロパガンダです。これに対する対抗策も日本にはありません。有事になったら、総理官邸と外務省、防衛省で、どういうキャンペーンを張るか、どういうアンチキャンペーンを張るか、事前に十分な訓練をしなくちゃいけない。特に最近はサイバーを使っていろんな情報が出てきますから。

もう一つアメリカがすごいなと思ったのは、**エネルギーではロシアを締め付けられないので金融で締め付けている**。SWIFTとか、外貨準備の凍結とかですね。戦後日本はけっこうな経済大国だったわけですが、実は大蔵省や経産省といった日本の経済官庁にとっての敵は経済的競争相手のアメリカでした。だから、他の国と戦争するときには自分たちの経済力をどう使うとか、どういう形でアメリカや西側諸国に経済制裁に付き合ってもらおうかということは、考えたことがない。そろそろ日本主導の経済制裁を考えておかないといけません。中国経済は異様にデカいので、逆にこちらが押し潰されて、経済制裁で負けるようなことがあってはいけません。

## ■ 習近平は台湾を諦めない

**岩田**：ありがとうございます。プーチンが裸の王様になっているというのはまさにそうですね。侵攻後にFSBの連中を全部根こそぎクビにしましたよね。あれは「よくも嘘をついたな、この野郎」ということで外したと思うんですけど、やはり独裁国家とはそういうもので、習近平もそうなる可能性がある。そういう体制があるということを認識して、彼らは我々とは全く違う判断をするという前提で準備するべきです。

3月9日の下院軍事委員会でアメリカ太平洋軍司令官のジョン・アキリーノ海軍大將が、習近平は三つのことを学んだだろうと言っています。一つはロシア軍の犠牲者数の多さ。これは習近平も中国が戦争するときには考慮せざるを得ないという意味でしょう。二つ目は国際社会の一致した抵抗と反対を、習近平はよく勉強しているだろうと。三つ目に、国民にかかる経済的負担。これ

はまだロシアに関して明確には結果が出ていませんが。この三つを中国は学んでいるだろうと、アキリーノは語っています。

また、アメリカのウィリアム・バーンズCIA長官は5月7日のフィナンシャル・タイムズで、プーチンの行為がアメリカと欧州の結束を強めてしまった、それが中国を落胆させていると語っています。中国の威信にも傷がついたじゃないかと、習近平はそう思っているはずだと、CIA長官は言っている。5月10日の上院軍事委員会ではアブリル・ヘインズ国家情報長官が、「中国は台湾侵攻に対してもう自信を持たずにいる」と言った。このように、中国は慎重になっているという見解が両長官から出ています。

話が前後しますが、4月25日にはロイド・オースティン国防長官がNATO加盟30カ国を集めて結束を促しました。そこで彼は、これからのアメリカの戦争指導方針は「ロシアの弱体化を図ることだ」と言った。これ、習近平にはものすごくこたえていると私は思うんです。ロシアは1979年から10年間アフガニスタンで戦争して弱体化した。結局89年に撤退しますが、その年にベルリンの壁が崩壊、2年後にはソ連邦自体が解体します。まさにアメリカは、ウクライナのアフガン化を図って潰そうとしてる。それが「ロシアの弱体化」というオースティンの言葉に具体的に表れていると思いますし、習近平はそれを目の前で見せられているわけです。2人の長官が言うように、中国が慎重になっているというのは間違いないでしょう。

一方で、だからといって習近平が台湾を諦めることはない。アメリカ空軍の上級戦略顧問であるエリック・チャンが、ボイス・オブ・アメリカでこうコメントしてます。「ロシアの侵攻が、迅速な軍事行動によってウクライナ占領という既成事実を作ることを目的としていたように、中国も迅速な軍事行動によって台湾占領の既成事実を作りたいと望んでいる」と。**中国はこれまでよりもさらに迅速で壊滅的な戦略が必要だと考えている。**ハイブリッド戦で台湾を経済封鎖するとか、海上警備区域を作って演習を行い、時間をかけて攻めるのではなく、エリック・チャンが言うには、台湾本土の重要都市へのミサイル攻撃や空爆、艦砲射撃などで一挙に台湾軍を無力化する。そしてアメリカが入ってくる前に多数の空挺部隊などを上陸させ、台北や高雄といった重要都市を占領し、1週間程度で全土を制圧下に置くという作戦を狙わざるを得ない。これは、今のロシア軍の状況を見ると、大変難しい。難しいけれども、もし中国が軍事侵攻するとすれば、こういう方向で彼らは準備するのではないかと。

全体的には、今のウクライナの状況を見て中国は慎重になっているだろうと思います。だから戦争が少し遠のいたということは言えないことはないかもしれないけど、それで我々は安心してはいけません。習近平が学んでいる教訓はおそらく我々と同じだと思いますが、中国はそれを乗り越えて、台湾を統一するためにはどういう方向があるかということを考えているはずですよ。

それから、北朝鮮の金正恩は何を学んでいるか。核戦力の有用性は明確に再認識したでしょう。彼らはアメリカしか見ていませんので、核戦力を増強して、対米交渉の道具として今のうち

にどう使うかということを考えている。おそらく今後、核実験もどんどん再開していくと思います。問題は、多分アメリカも感じているはずですが、**北朝鮮の核実験とミサイル発射は誰にも止められない**ということ。これも隣の日本としては大問題であって、金正恩に対する抑止すらできない状況をどうするのかということを考えていかないといけません。

——[第3部へ続く](#)——

---